

バウム・テストの解釈プロセスに関する研究

後 藤 由美子

1. 問題と目的

バウム・テストは実施が簡便なため、1970年に林らによって日本に紹介され、以後急速に広まった。投影法が、テストとして成り立つためには、被験者のテスト行動だけでなく、検査者側の解釈により、正確に被験者のパーソナリティを言い当てるといふ検査者の解釈という行動が必要となる。しかし、バウム・テストの研究において、そういった検査者側の解釈に関する研究はなく、解釈といえば Koch (1949) の書いた本を頼りとし、あとは自ら積み上げた経験に基づく方法に頼っているのが現状である。解釈に関する研究が進められにくい背景には、同じ木の特徴であっても被験者によって意味が異なったり、全体の背景との関係で意味が異なったりするため、一対一対応的な意味が見い出せず、科学的になりにくいことである。バウム・テストにおいて、そうした複雑な描画表現をどう読みとり、解釈によって複雑な人間像を、どう浮彫りにしていくことが効率的であるのかを探ることが、本研究の目的である。そこで、本研究では、そうした解釈手順を確立していると思われるバウム・テストの熟練者に解釈を行ってもらい、各自が積み上げてきたバウム・テスト解釈理論を、明らかにすることを目指す。また、その比較として、未熟練者の人にも同様に解釈をしてもらい、その違いを明らかにすることで、より有効な解釈の仕方というものを考える。またそれと共に、バウム・テストが有効なものであるかどうかの妥当性について、解釈の結果である所見の内容的妥当性を検討することで明らかにする。

2. 研究 I 【解釈プロセスの研究】

〔方法〕被験者は、熟練者11名と、未熟練者12名であり、バウム・テストの解釈をしてもらった。熟練者の規準としては、臨床経験5年以上で、バウム・テスト解釈を100枚以上した経験のある人とし、未熟練者の規準としては、臨床の経験はあるが、バウム・テスト解釈が10枚以内である人とした。刺激図版となったバウムは、事前に予備調査で集めたものの中から選び、大学4年、25歳男性K君のバウムを用いた。手続きとしては、①第一印象：10秒間提示後、バウムを伏せ第一印象を述べて貰う。②外言化：もう一度提示後、解釈を考えてもらうが、なるべく考えている過程を言語化してもらう。③前

所見：一応まとまったところで、解釈を述べてもらう。

④所見：10行程度で、実際に所見を書いてもらう。外言化と前所見については、テープに録音し、逐語録により分析した。

〔結果と考察〕①第一印象、②外言化、③前所見、④所見を解釈プロセスの4ステージとし、各ステージで出現したセンテンスを分析することで、解釈プロセスを見ようとした。全センテンスを内容で分けると、A形態的特徴に関するもの・B人格特徴に関するもの・C全体の印象に関するもの・D状態像に関するもの・E解釈とは直接関係の無いもの、5カテゴリーに分類できた。また、各カテゴリーで出現したセンテンスを項目ごとに整理していくと、Aカテゴリー29項目、Bカテゴリー36項目、Cカテゴリー18項目、Dカテゴリー14項目、Eカテゴリー4項目、合計101項目が得られた。各群による、ステージごとの推移を、項目の出現数からみた。

熟練群は、ステージを経るに従って、同じ傾向で出現数が増えたり減ったりしており、A形態的特徴とC全体の印象のカテゴリーが徐々に減少し、反対にB人格特徴とD状態像のカテゴリーが増加している。また、その増加と減少の割合から、各ステージで成されている作業を考えるならば、外言化で成されているのは、主に形態的特徴から、人格特徴を類推することである。外言化後期から前所見で成されていることは、外言化で類推した人格特徴を更に深めて考えることと、人格特徴と全体の印象などから現在の状態像を類推することである。前所見から、所見にかけて成されることは、人格特徴、状態像についての統合を行っている。未熟練群については、熟練群と異なる点は、ステージごとの推移が熟練群のように、同じ傾向をとらないことである。第一印象から前所見までは、熟練者と同じでAとCカテゴリーが減少し、BとDカテゴリーが増加しているのであるが、所見になるとAカテゴリーが増加し、Dカテゴリーが減少してしまっている。これは、未熟練者が木の形態的特徴から人格特徴を把握し切れず、形態的特徴のまま記述するしかなかったこと、また、人格特徴や印象などから状態像を思い浮かべることが出来なかったためと考えられる。また、C全体の印象がほとんど減少しないのも熟練者と異なる点であり、これは未熟練者がバウムから受けた印象を、人格

特徴や状態像など人間像へと思い浮かべることが出来なかったためと考えられる。

また、解釈活動においてもっとも重要な意味を持つ、B人格特徴のカテゴリーを再分析することによって、解釈プロセスをより細かに見ようと、Bカテゴリー36項目を、人格特徴の内容の詳細さによって12項目ずつ3次元に分類した。その結果、Ⅰ概念的な大まかな人格特徴・Ⅱ状態像と結び付いた対社会的な人格特徴・Ⅲ個人の特性を表わす細分化した人格特徴の3次元が得られた。その次元別の項目出現の推移をみると、熟練群は、ステージを経るにしたがって、Ⅰ次元が減少し、Ⅲ次元が増加するという一定の傾向が見られた。これは、熟練者が常に、大まかな概念的な人格特徴から、より細かな特性を探ろうと心がけているためと考えられる。それに比べて、未熟練者は、第一印象から外言化にかけては、Ⅰ次元が減少し、Ⅲ次元が増加しているものの、外言化から以降、所見にかけては、熟練者とは逆のⅠ次元が増加し、Ⅲ次元が減少するという結果になっている。これは、未熟練者が、まとめる作業が中心となる前所見や所見のステージになって、より細かな人格特徴を探ることは出来ず、また、その細かな人格特徴を一つの間像として統合することも出来なかったため、初期に出された概念的な人格特徴に戻されたと考えられる。

そして更に、ステージ別に、新規項目や所見に残らなかった消失項目についても分析した。その結果、熟練群は、各ステージで成すべきことが決まっており、方針をもって解釈を進めているが、未熟練者は、新規出現に多い項目が消失項目でも多かったりと、無駄の多い解釈の進め方をしていることが分かった。これは、未熟練者は、解釈の進め方に一定の方針を持っていないためと考えられた。

3. 研究Ⅱ 【妥当性に関する研究】

【方法】パウム・テスト解釈の妥当性を見るために、パウムの描画者K君を既知の人を被験者として、K君の

パーソナリティの情報を集めた。その内訳は、大学の同級生10名とK君の指導教官の11名である。質問紙については、1. 論理性・2. 内向性・3. 攻撃性・4. 感受性・5. 安定性・6. 被影響性・7. 積極性・8. 男性性・9. 対人関係・10. 社会適応の10項目について自由記述で具体的に答えてもらった。その結果をまとめたものを規準とし、所見と照らし合わせて、正答数、誤答率、正答率を算出した。

【結果と考察】その結果、浮かび上がったK君像とは、外から見て、力強く男らしいと言うことはないが、自分のことや周りのことを考えるタイプで、内側には自分の意見を持ったシンの強い人となる。それに照らし合わせて、正答数、誤答率を求めたが、所見の中には、周りの人からは測り知れないような、内的な問題に触れたものがかなりあり、所見のセンテンス全体中約70%しか正答か誤答のどちらかに判定することが出来なかった。そのため、妥当性についての明確な結果を得られることは出来なかった。しかし、70%のセンテンスの結果を見ると、熟練者が75%の正答であり、未熟練者が65%の正答であり、どちらもかなりの妥当性が認められ、パウム・テスト解釈の妥当性についても、傾向として示唆された。また、熟練者と未熟練者に差があったことから、訓練や経験により正答率が高くなることが認められた。

4. 総括的討論—解釈モデルの検討

研究Ⅰの結果から、熟練者の解釈プロセスモデル、未熟練者の解釈プロセスモデルを考えた。それを、図1・図2に示す。熟練者と未熟練者の解釈プロセスの大きな違いは、熟練者が木の特徴から見いだした人格特徴を更に深めて、より細かな人格特徴を見いだしたり、状態像を浮かび上がらせたり出来ることである。それは、一人の人間像を浮かび上がらせるのに、常に、特性の人格特徴と現在の状態を知ろうとする方針を持っていることの違いと考えられた。

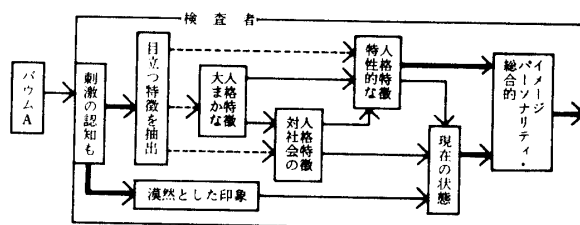


図1 熟練者の解釈プロセスモデル

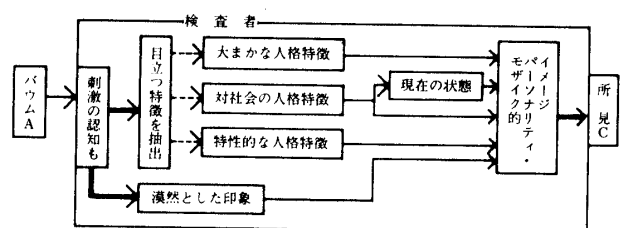


図2 未熟練者の解釈プロセスモデル